

素顔のカント : ある小説に描かれた哲学者像(1)

竹内, 昭

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

82

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

22

(発行年 / Year)

1992-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004560>

素顔のカント(一)

—ある小説に描かれた哲学者像—

竹内 昭

—

人の伝記は、読む側からすれば、考証をさり気なく隠して、物語の形で描かれればどれほど興味が湧くことであろう。例えば『アマデウス』の上演以来急騰するモーツァルト人気をみるにつけ、バッハに『ゼバステイアン』はできないのか、という思いが湧く。愉快で人間的なゼバステイアンをスクリーンで活躍させ、こわもての通念を打ち破れば、世はバッハ人氣に沸き立つのではないか(磯山雅『J・S・バッハ』講談社現代新書、六六ページ)と期待するように。わがカントなら、ここではさしずめ『イマーヌエル』となるうか。しかし「だが、それはやはり無理」(同)だ。『ゼバステイアン』が無理なら、わが『イマーヌエル』はなお無理であろう。芸術家(音楽家)と哲学者では一般の需要が違うからだ。しかしその点はさておいて、『ゼバステイアン』が無理な理由を、磯山は第一に資料が少ないこと、第二にバッハ自身の個性にある、としているが、カントの場合もこの理由がほぼそのまま妥当するように思われる。

まず個性に因しては、バッハの性格について、「人なつくく愛敬たつぶりなモーツァルト。ヨーロッパをまたにかけて波瀾万丈の人生を送ったモーツァルトにくらべれば、バッハの一生は、はるかに堅実、常識的でおもしろ味

がない」(同、六七ページ)というのはカントの場合にもそのまま当てはまる。バッハの「生活圏は中部ドイツをほとんど出ず、仕事場は、教会や礼拝堂」(同)と言うなら、カントもまた東プロイセンの首都、バルト海沿岸に位置するケーニヒスベルクを離れたことはほとんどなかった。また物語に彩りを添えるのは、男女の絡みというのが常道であるのが、女性との関係について言えば、バッハの場合は性愛を超えた、存在への高邁な愛へと高まってしまっている(同、一一二―一五ページ)なら、カントの場合も同じく人間の「尊厳」としての愛であった、と言うことができる。前者が家庭円満で子たくさん、後者は生涯独身であった、という違いはあっても、ともにフェミニストという点では共通しており、似たような女性観をもっていたと見て差し支えない。

物語のもとになる資料が少ない、という点ではカントもバッハに引けを取らない。書簡については、量が多いという点では、カントはモーツァルトと遜色はないが、バッハには個人的な書簡ははるかに少なく、その内面はほとんどうかがえない(同、六七ページ)という点ではカントも同様である。カントの往復書簡の大部分は公生活、研究に関するものであって、個人的な生活感情を吐露したものはほとんどなく、モーツァルトの比ではない。

* カントの往復書簡は、アカデミー版全集第一〇巻から一二巻まで、三巻に収録されているが、往復書簡全一一四五通のうち、カント自身の手紙は四二六通ある。モーツァルトの書いた手紙は約三〇〇通伝えられていて、散逸したものが二〇〇通はあると言う(柴田治三郎編訳『モーツァルトの手紙』(下)、岩波文庫、「編訳者のあとがき」による)。

書簡以外にも、カント自身の書いたその人間性を窺わせるものはあまりなく、カントその人の聲に接した人が記録したのも、断片的なものを除いて、まとまったものではわずかしかない。よく知られているのが三人の弟子たち、すなわちポロウスキー、ヤッハマン、ヴァジアンスキーの記録である*。これらの原著はカントの歿年の一八〇四年に三巻本でケーニヒスベルクのニコローヴィウス書店から出版され、一九〇七年にハレで、次いで一九二二年にベルリンで一冊本として刊行された*。

* ポロウスキー(Borowski, Ludwig Ernst, 1740-1831)はケーニヒスベルクの牧師の家に生まれ、フリードリヒ学院を経て、一七五五年にケーニヒスベルク大学に入学し、神学を学び、カントの講義を聴講し身近に接した。卒業後は聖職者、視学官として活躍した。この伝記にはカント自らが校閲加筆した。

ヤッハマン (Jachmann, Reinhold Bernhard, 1767-1843) はケーニヒスベルクに生まれ、一七八三年にケーニヒスベルク大学に入学、八四年にカントの助手となり、九年間その講義を聴いた。毎日のようにカントに親炙し、著作原稿の筆写の助手もした。のち小学校、師範学校の校長となった。この伝記はカントの希望もあって企画された。

ヴァジアンスキー (Wasinski, Ehregott Andreas Christoph, 1755-1831) はケーニヒスベルクに生まれ、一七七二年にケーニヒスベルク大学に入学、はじめ自然科学と医学を学び、のち神学を修めた。七四年にカントの助手に選ばれた。聖職者となつて一時カントから遠ざかったが、九〇年に再開してから再び付き合ひがはじまり、カントの日々の話相手になるとともに、その身辺の世話もした。老衰するカントの介添えとなり、葬儀を執り仕切り遺言状の執行人ともなった。

* * 末尾文献欄参照。

これがカント伝の一番古いもので、そして一次資料としてはこれが唯一であろう。その他の伝記はほとんどがこれを出典とするか、その焼直しである。しかし三つの伝記は三者三様で、それぞれ性格が異なっているが、共通するのは、カント存命中の執筆であるから、自ずからいくらかは制約があるはずで、著者の自由な筆使いは殺がれた点であろう。ポロウスキーのものは、カントの生涯、著作活動、その声価、生き方、と全般にわたっているが、「カント自身の校閲加筆済み」である。ヤッハマンのものは、生活者としてのカント像が強調されているが、カント自身に伝記作者として望まれて企画され、その要項についてはお互いに往復書簡で打ち合せをしている。ヴァジアンスキーのものは、晩年のカントの家庭生活が主で、死者への追悼の辞という性格ももっている。したがって、これらは一級の伝記資料ではあつても、これらそのものに物語的な面白さを期待するのは無理である。

しかし物語としての資料は少ないなりに、個性が常識的ななりに、これらを素材にいくらかは物語風に描くことは可能であろう。別に波瀾万丈の騒々しい『アマデウス』でなくとも、その対極の『イマヌエル』なら可能であろう。同じ音楽家として、『ゼバスティアン』が『アマデウス』になれたらと期待するのは当然としても、そういう『イマヌエル』はありえない。しかし「物語」だっているいろいろある。少ない資料に節度ある潤色をして、時代や世間や人々との係わりあいを生き生きと、けれども静謐にいわば水彩画のごとく描かれれば、それこそこの哲学者にふさわしい「物語」であろう。——そんなカントが登場する小説がある。すなわち

Erminia von Olfers-Batocki, *Das Taubenhaus, 100 Jahre Familiengeschichte in und um Königsberg 1762-1862 als Roman erzählt*. (エルミニア・フォン・オルファーススリバトツキ『鳩小屋——ケーニヒスベルクゆかりの家族の一〇〇年史 一七六二〜一八六二年——』。末尾文献欄参照)

である。ただしここではカントは直接の主人公ではなく、その姿は間接的に、要所要所で見え隠れに描かれるだけである。しかしこの小説全体はカントの精神に貫かれ、それがこの小説の舞台であるケーニヒスベルク風景の背景をなしている、と見ることが出来る。本稿では、この小説に描かれたカント像を吟味して、人々の見たカント、世に棲む人間カントを読み取り、素顔のカントを浮き彫りにする。

二

この小説の存在を伝えるのは、フリッツ・ガウゼ『カントとケーニヒスベルク』(末尾文献欄参照)である。「カントとその門弟たち」の章につきのように書かれている。

「ボック兄弟の二人はカントの同僚であり、兄のヨハン・ゲオルクは詩学の教授、弟のフリードリヒ・ザームエルは神学者かつ多作な作家で、『東西プロイセン王国の経済事情の推移』およびアルブレヒト公の最初の伝記作者であった。エルミニア・フォン・オルファーススリバトツキの小説『鳩小屋』は娘のヘートヴィヒ・フォン・レール・ヘッフェルの手で一九六八年に出版されたが、作者はこの小説でこの時代のボック一族とケーニヒスベルクを評価した。この小説にはカントも登場する」(訳書三二ページ)

この「カントも登場する」小説の作者は、原著のカヴァー裏解説文や、作者自身およびその娘による「はじめに」によれば、東プロイセンの旧領邦農場主の末裔で、一八七六年に生まれ、一九五四年に歿した。この女流作家は、主に方言詩、物語、素人芝居の脚本を書いた。この本は一九四〇年から四二年の戦時中に書かれたが、作者の生前は刊行が叶わず、一九六八年に作家の娘の手で私家版として出版され、さらに一九八六年に新版として公刊された。

(ここで吟味するのは、後者の新版である。)

ここでこの物語の概要と結構を語ろう。

第二次大戦後、ドイツはオーデル・ナイセ河以東の領土を失い、これらの大部分はポーランドおよびソ連に帰することになった。この旧ドイツ領の故郷を失ってドイツ(旧東・西ドイツ)に引き上げを余儀なくされた人たちはいまだに望郷の念を持ち、彼方に熱い視線を送っている。これは、そんな人たちのために、同じ境遇にある作者が贈った小説である。因みに、作者はこの本の「はじめに」でつぎのように言う。

「国外追放のあとで

地図は一変してしまっています。そこには数々の農場、村々、町々があります。諸家族は遠くに追い立てられ、あるいは全く絶えてしまっています。私は最初この本を私の親戚の者だけに親しめるものにするつもりでしたが、結局多くの東プロイセン子に彼らの望みを叶えてやるためにこれを公刊する決意をしました。というのも、この本は、私たちの心の中でいつまでも消え去ることなく生き、そしていつまでも生き続けるであろう故郷に対して、たくさんの思い出を呼び起こすはずだからです。

一九四七年夏 バート・ハルツブルクにて

エルミニア・フォン・オルファース「バトツキ」(S4)

ここでは、大河家系小説の形をとりながら、失われた故郷の最大の都市であったケーニヒスベルクを中心に、東プロイセンの一八世紀半ばから一九世紀半ばにかけての一〇〇年の歴史が描かれている。

小説の主人公は作者の父方の曾祖母で、この主人公の父とその兄(主人公の伯父)は、ともにケーニヒスベルク大学の教授と学長を務めた。物語は、主人公の伯父でケーニヒスベルク大学学長の葬儀の場面から始まる。こうしてこの一族の一〇〇年の推移の物語を縦糸に、一八・九世紀のプロイセンとロシアとの関係、フランスとの戦争、さらに東プロイセン地方の文化・経済(ことに領邦農場経営)・社会事情を横糸に、長尺の織物が編まれる。都市や農漁村の四季の光景描写を背景に、ケーニヒスベルク大学を中心とした学者や学生の知識階層から、芸術家や出

版者、大商人や手工職匠、貴族、領邦領主、聖職者、軍人、漁師や筏師、郵便馬車の御者や馬商人、猟師や農業労働者、市場に集まる市民や女商人、等の生活が生きてきごと細かに描かれる。小説であるからには、たしかに縦糸の方はフィクションの度合いが強く、作者の想像力のたまものには違いないが、しかし主要な人物はほとんど実在であり、横糸の方は、人物の登場場面はもちろん創作であるが、その事実そのものは歴史そのままのようである。その意味ではこれはフィクションと史実が渾然一体となった一種の歴史小説と言うことができる。

全体は六部に分けられている。

- | | | | |
|-----|------------|-----|------------|
| 第一部 | 一七六二～一七六八年 | 第四部 | 一八〇七～一八一五年 |
| 第二部 | 一七七九～一七八五年 | 第五部 | 一八二二～一八四三年 |
| 第三部 | 一七九五～一八〇四年 | 第六部 | 一八四八～一八六二年 |

主人公と彼女をめぐって登場する小説の筋を構成する人物の他に、歴史上の登場人物は多彩であるが、とくにライヒャルト、E・T・A・ホフマン、ハーマン、ヘルダー、シェンケンドルフ、ゴットシェート等、著名な学者・芸術家が登場する中で、出色は哲学者カントの登場である。前者を縦糸の人物群、後者を横糸を構成する人物群とすれば、前者の中心は当然主人公であるが、後者の代表はカントである。すでに述べたとおり、カントは彫絵のように登場するだけであるが、主人公はカント主義者と言ってもよく、その理念を体現する人として描かれる。縦糸と横糸は、各主人公がいわば弟子（もちろん直接ではないが）と師匠の關係で構築されるのである。

ガウゼは「この小説にはカントも登場する」とさりげなく言うだけであるが、「カントも登場する」どころか、彼への言及場面はかなり多く、原著で四十数ページ、本文ページ数が四三九ページであるから、ほぼ一〇パーセントにおよび、しかも全編にわたってさまざまな箇所でも語られている。カントの生歿年は一七二四～一八〇四年であるから、この物語の前半部はあたかもカントの成年から歿年までの生活暦に当たっている。ケーニヒスベルク大学でのカントの同僚としての、主人公の父の記述（第一部）から、カントのいくつかの登場場面を経て、その葬儀の場面（第三部）まで、さまざまなカント像が伝記にもとづいて描かれ、彼の死後の第四部以降も最後の第六部まで、

その業績が折りにふれて語られる。

三

まず前半部(第一部と第三部)で語られるカントの死去までの素顔を追ってみよう。

カントの名は「はじめに」(Zur Einführung)に登場する(S. 1, 3)。ここで作者は主人公エヌステイナー(Boek, Johanna Justina, 1762-1841)の父、ボック(Boek, Friedrich Samuel, 1716-1785)がカントの時代にケーニヒスベルク大学の教授だったこと、カントや、ヘルダー、ライヒャルト、E・T・A・ホフマン、ヒッペル等の本や、彼らについての本がこの小説の資料になったことを述べ、この小説のカントの影響、あるいは主人公のカントへの傾倒を暗示する。

第一部は主人公の伯父のケーニヒスベルク大学学長ボック(Boek, Johann Georg, 1698-1762)の葬儀の場面から始まり、親族が一堂に会して久しぶりの邂逅に話が弾む。ここでF・S・ボック教授の甥で、グーテンフェルト農場在住の学問好きのカールゴットリープが伯父のもとに置いてもらって勉強をして学者になりたいと言う。

1「……僕は学者になりたいんです。どうか僕をここに置いて下さい!」〔略〕〔略〕

甥は二人の伯父を交互に見て言った。「……伯父さん、僕は伯父さんの科学研究の助手をしたいんですよ!

僕はあなたの講義を聴きたいんです。あなたの著書を読みたいんです。あなたの詩学を学びたいんです」

カールゴットリープは熱烈に伯父を仰ぎ見た。伯父は微笑んで言った。「たった一人の教授のもとで若き学徒が講義を聴こうって言うのかい?」

「それは僕が入学してから伯父さんと先生方が決めてくれるでしょう。ここにはたくさんの方の天賦の才に恵まれた師がいますから。カント講師の講義を聴く機会に恵まればいいんですが、どうでしょう?」

教授は目を輝かせて若者を見た。「親愛なるわが友よ、君は聖職者の息子だ。哲学と神学はしばしば同じ道は歩まない。よく考えてお母さんと相談しなさい」

「ああ伯父さん」とカールゴットリーブはいきりたって言った。「あなただって神学の教授で博物学を教えているではありませんか」

「そのとおりだ、わが聡明なる甥よ。さまざまな学識は、プレーゲル河の流れのように、ほら、その下で別れでも再び合流するものなんだ。私たちの学識が深くなればなるほど、それだけ親密に私たちのさまざまな学問は互いに接触し合うんだ」(S.17)

この場面、時は一七六二年、カントは三八歳、私講師の身分で、ルソーの『エミール』から感銘を受けた時期である。この年からヘルダー (Herder, Johann Gottfried, 1744-1803) もカントの講義を聴き始めた。

F・S・ボックは学長の兄とアルトシュタット市場の家を上下階に分けて住んでいたが、兄の死後それを売却することに、フランス館通りにある新しい家を契約しようとしている。ボックは妻のアンナと一言三言やりとりしたあと、その家の持ち主であるスイス人の時計屋ドゥローを訪問して家の購入契約を交渉する場面。

2 「それがさ、城池の端のドゥローの家じゃ鳩が入りしているんだよ！」と教授は言った。「それが本当の鳩小屋さ——インステルブルクの君たちの家のような」

彼は妻に接吻したあと、踵を返した。(S.32)

教授が真鍮の把手を押して再び離れたとき、フンベルト・ドゥローの家のドア・ツイターがカタカタ鳴った。時計の歯車装置を調べていたムッシュュー・ドゥローは目からルーベを外して言った。「おや、ムッシュュー・ル・プロフェッセル！ ケル・オネル「なんて光栄なこと」！ 今日はいやらしいことに特上のお客様方だ。今し方マギスター・カント先生がお出でになって、ご自分の新調のフロックコートに合う私の店の極上の金釦をお買

いになりました。私は釦の下に茶色の布を当てなければなりません、何故ってフロックコートはコーヒール色になるに決まっていますからね。釦が生地から際立って見えてとてもラヴィサン「素敵」でした！」(S.33)

カント先生もかなりお洒落だ。この年、一七六二年にこの家で主人公のユスティーナが生まれ、以後この一家は長くここに住むことになる。この家には城池に面した、サンスーシ・アン・ミニアチュール「ミニ無愛宮」とドゥローが称する庭園があり、切妻部屋には鳩小屋がある。ここに初めてこの小説の題名の由来が明かされる。

ある夏の日、ザームエル教授と学生カールゴットリーブはケーニヒスベルク市の郊外散歩の途次、モディッテン村を通りかかり、そのハイカー酒場の森林小屋に立ち寄る。「ヴォベザー父さん」と呼ばれているこの小屋の主人は、客にスグリ酒を勧めて言う。

3 「かみさんは来ませんや。敢えて言いますがね、高貴に過ぎるお客さまのご来駕の栄を賜わったひにゃ、かみさんは来ませんぞ。あいつは、仕事があるって言うんですがね。けれども旦那方、気を悪くしないで下さいよ。こないだマギスター・カントさんのご来駕を賜わった時も、やつは来なかつたんですよ。カントさんは時たままた一人て荒野を散歩するんです。しかし——敢えて言いますが——それからあの人はあっしの小庭園で休息し、スグリ酒を召し上がる時には、あの人はとても変てこな考えに耽るすべを心得ているんですよ。あの人の言っていることは、自慢じゃないが、あっしには解りません。つい最近あの人はここで何日も過ごし、上のあっしどもの小さな屋根裏部屋にひっそりと住み、机の上にはびっしり書き込まれた紙が一枚のっていました。あっしには解らんかったですが、そこにはこう書いてあったんですよ、『美と崇高の感情に関する考察』とね。あの人はこれで緑の荒野森林のことを言っとるんですかね？ あの人はこれでスグリ酒のことを言っとるんですかね？ と言うのも、あの人はもったいなくもあっしの所でお飲みになった上等のワインをしばしば替めてくれましたからね。ご覧なさいまし、旦那方、今年もどれだけ見事に樹の枝が繁っておりますかね？」(S.43)

『考察』の刊行は一七六四年であるから、この場面は六二年か三年のことであろう。なおここモディッテン村にはカントの小さな夏別荘があったが、今も保存されていて、このハイカー酒場の森林小屋はそのスグリ酒とともに有名だったらしい(文献(?)による)。なおこのカントの夏別荘は一九二九年に市によって記念館として整備された(文献(6)、訳書一七二ページ)。

学生カール・ゴットリーブと彼の女友達フランツィスカとの会話。

4 「僕は神から授かった才能を無駄のないように使いたいんだ。兄は吹き出すんだけどね。ねえ、僕は夢中になれることに専念したいんだ、僕は天分を決して実用的に利用したくないんだ」

「ではあなたは農学は勉強しないのね、あなたには実用的な利益は必要ないんだから。ねえ、あなたは何のために勉強するの？ あなたはカント、ポック、ヴェルナーの講義を聴いているわね。まだ長く続くの？」

「僕はクラウスの講義を聴いている。とくに力を入れて聴いているのはレストックと法学者の講義なんだ。もう春だ。一年なんてあつと言う間に過ぎるから、その時は弁護士になりたいんだ」(S. 88)

ヴェルナー (Werner, Jakob Friedrich, 1782-1782) は修辞学および歴史学教授。クラウス (Kraus, Christian Jakob, 1753-1807) は最も才能あるカントの門弟で、大学卒業後、カントの食卓仲間になった。彼が実践哲学と官房学の教授になったのは一七八〇年であるから、この記述(六〇年代)と時代が合わない。レストック (L'Escoq, Johann Ludwig von, 1712-1779) は法律学教授。シェフナーによれば「レストックはカントに反感を抱いていて、……私がカントの講義に出ることも許さなかった」(Mein Leben)。

少年時代のヘルリーン宮廷楽長ライヒャルト (Reichardt, Johann Friedrich, 1752-1814) とその妹は、城池の端のカイザーリング伯爵家の夏の夜会から抜け出して、カール・ゴットリーブたちの舟遊びに加わって夜会の報告を

する。

5 「僕たち若駒のように抜け目がないや。今日は音楽がしたくないんだ。伯爵夫人は初めて夏の集会広間を開いたんだ。スピネットも冬季用の広間から運び下ろされた。今ね、五月祭に敬意を表して、たくさんのお客が来ているよ」

この兄妹は物語に卓越した才能をもっていた。「私たちのお父さんはガラガロッセと四頭の斑馬と一緒に、公爵夫人を迎えにホルシュタインに行ったのよ」

「お父さんはいつも自分が三種類の頭カポ、「マイスター」の称号を持っているって、冗談に自慢したんだ。それはね、既告頭、音楽頭、酒蔵頭なんだ！」

「私はマギスター・カントが、薔薇色の素晴らしい上着を着て、よく手入れされた艶のある白い髪を着けて、こちらにやって来るのを見たわ」

「ハーマンも来たよ。多分、カントと議論を続けるためじゃないかな？」

「伯爵夫人は、多分、二人の意見を一致させる術を心得ているわ。でも、私たちにはスピネットの下に坐ったり、哲学の議論を聴いたりするなんて、退屈だわ」

「僕たちのハルトクノッフ先生がもうここには残念だなあ！」

「そしてヘルダーもよ、彼はハルトクノッフに続いてリガに行ったわ。あの人は北国の英雄叙事詩の朗読にかけては、ハーマンよりもお客さんを楽しませるのが上手ね。ハーマンの奇妙な考えを聴きたがるのは伯爵夫人だけなんだけど」

「今日は伯爵夫人のお客さんたちはおそらく庭園を散歩したがるだろうね」

「紙提灯が岸辺を照らすでしょうね！ 宮殿がイルミネーションで飾られているわ」

「僕たちそれを水の上から楽しめるなんて、素晴らしいね」(S.74) [略]

彼らは庭園に面した広間の明かりの点いた扉のそばを忍び足で通り過ぎた。そこでは朗読する大きな声をした。明かりが若いヒッベルの頭と彼の開いた本を照らしていた。ほんの教瞬間、三人の子供の両目が明るい部屋の中を、そして色鮮やかに刺繡された中国製の壁紙と蓋を開けたスピネットを眺めた。厚ぼったい弁髪のを着けたハーマンの細長い横顔が、ほのかに見える背景から際立っていた。婦人服のだぶだぶの袖が、戸棚の脇で絹の光沢を見せていた。扇子があちこちに移動した。八重葎の匂いがした。

カントの姿は見当らなかった。いつものように彼は早めに家路についたのだ。今ハーマンが語っていた。彼の訴えかける声は、子供たちがそこから遠ざかるに従って、だんだん小さくなっていった。(S. 76-77)

カントの出席した社交の場が、影絵のように、あるいは一筆描きの水彩画のように描かれる。この伯爵夫人のシャルロッテ・カロリーネ・アマリーニ(1729-1791)は、賢明で哲学の素養も深く、ケーニヒスベルクの知識界、音楽界の中心であった。夫とともにカントのよき友であった。カントは彼女のことを「女性の誇り」(『人間学』Aland, Bd. VI, S. 262)と言っている(ただし、この光景は七〇年代の初めの頃である)。のちにライヒャルトもカントの講義を聴いた。

同じ夜、カントの帰宅後の場面。

6 通りの側はいつまでも騒がしかった。足音、笑い声、絶え間のないわめき声。五月の夜はケーニヒスベルク全体が戸外を歩く人でいっぱいであった。

家々の窓は、みんな寝静まっている冬季と同じように暗かった。レーベニヒト町庁舎の屋階の二つの窓だけが明るかった。不思議なことであった。ふだんは、上の明かりは一〇時に消された。今日は騒音が賢者の眠りを妨げたのだ。マギスター・カントは今日はもう長いこと静かに坐って、原稿用紙の上に身を屈めていた。(S. 78)

カントの友人で書籍商のカンターの住居は、旧レーベニヒト町庁舎がアパートに改築された建物の中にあつたが、この頃(六八年)カントはその家の三階の屋根裏を住まいにしていて、そこで講義も行なっていた(文献⑥、訳書一二四ページ)。

その講義の光景が、カールゴットリーブとその母マリアとの会話で描かれる。

7「ああ、お母さん、礼拝の時、僕にとってはまったく多すぎるほどの礼式や慣用句があるんですよ。さまざまなきらびやかなもの、目の保養になる壮麗なもの。お母さんも一度マギスター・カントの講義を聴ければいいんだがなあ。僕たち学生は彼の小さな部屋で折畳み椅子や窓台に坐つて、ひしめき合っているんですよ。僕たちは床に腰を下ろして、彼の言葉に陶醉して耳を傾けるんです。僕たちには新しいもの、世界を包括するものがあるんですよ、お母さん」

マリアは真剣に、いくらか不安そうに、息子を見つめて言った。「お前はキリスト教の聖職者の息子だつてことを、忘れないで」(S. 88)〔略〕

〔略〕お母さんが食卓に向かつて感謝のお祈りをする時には、そこから温かい、心の底からの信心深さが感じとれるんだ。しかし町の婦人たちはそうじゃないし、残念ながら敬虔主義で得意になっている——でも実際は自分自身でいい気になっているだけなんだけど、多くの男の人たちもそうじゃないんだ。——ああ、お母さん、誰も理解できないかも知れないけど、僕たちの偉大なカントは神に因することを当たり前な人間存在の中に探究しているんですよ。お母さん——僕たち学生は彼の生き生きした言葉に魅了されるんです、でもそれは長く続かないでしょう、それから、ハル大学やライプツィヒ大学やその他の大学では、教授たちが自分の講義のなかで、僕らのカントがケーニヒスベルクで書いた著書の一部を講義するでしょう」(S. 88-89)

信仰と学問、宗教と哲学の関係を、母と息子が代弁して語り、本当の信仰、本当の知識のあり方がカントによる

人間存在の分析に求められる。

カール・ゴットリーブは謝肉祭の日に、女友達のフランツィスカとライヒャルト兄妹と一緒に馬橋で遠出をする。その初めと帰途の場面。

8 「ゾフィー・ライヒャルトが笑いながら言う」今日は謝肉祭だから思い切って馬鹿なことをしようって、私たち、今し方思いついたのよ。

「私たち」とツィスカは言った。「学生の扮装をして、マギスター・カントを表敬訪問したらどうかしら！」
(S.92)

カール・ゴットリーブは再び星を見た。マギスター・カントは講義の中でいつも好んで星の世界の秩序と人間の内面における法則性とを比較して話したものであった。カール・ゴットリーブはさらに考えた——偉大な法則と神の命令が存在した、国法と国王の指令が存在した、しかしまた人間が自分自身に指定する小さな命令と権限も存在した。いかなる道徳法則にも違反しなかった法律が存在した。カール・ゴットリーブは心の中で笑った——そうだ、小さな、素敵な楯行法規も。(S.97)

これは名高い『実践理性批判』の第二部方法論の結語の一節が下敷きになっている。すなわち「繰り返し熟考すればするほど、つねに新たにそしていや増す感嘆と畏敬をもって心を充たすものが二つある。すなわち私の上にある星をちりばめた空と、私の内にある道徳法則とである」(Akad. Ausg., Bd. V, S. 288ff.)である。そこで展開されるのは、人間にとっての自然と道徳の問題である。ただし、この書の出版は一七八八年であるが、小説のこの場面は六〇年代で、事実とはかなりずれがある。

* この問題については、拙稿『実践理性批判』吟味」(三)』(『法政大学教養部紀要』第四六号、一九八三年)で論じた。ポック教授が肖像画家、ベッカー(Becker, Johann Gottlieb, 1720-1782)の家で肖像画を画かせながらの雑談。

9 「略」あなたの肖像画は書店の装飾になるはずですからね。これが成功すれば、カンターはもっと多くのケーニヒスベルクっ子を、そればかりか全く学術的なシベリアをも描かせるつもりですよ」

「例えばマギスターだろう」

「ケーニヒスベルクではカンターはカントの比較級だなんて言われていますが、私はカンターは自分の原級がいなくて困るなんてことはないだろうと思いますよ」

「カンターの理想的な書店は、彼がそう呼んだように、ミューズたちの神殿になるだろう。レーベニヒトの町庁舎の天井の高い部屋はまるでそのために作られたようだね。〔略〕」(S. 113-14)

カンターは自分の書店に古代ギリシア・ローマの男の胸像二体と、現存の著名人の肖像画九点を飾っていたが、その中にベックカーの画いた六人のケーニヒスベルクっ子の肖像画があった。それはボック、ヒッベル、シェフナー、リンドナー、ヴィラモフのものであったが、カントの像は一七六八年に画かれた(文献⑥、訳書二一―ページ)。

このカンターの店の建物の一角にカントの住まいがあった(すでに見たように、引用6でも同じ住まいの場面が描写されている)。

10 大火のあと改築されたレーベニヒトの町庁舎は正面に窓一〇個がついた規模で、その一階の右手には書籍商のカンターが店を構えていた。彼はその上のいくつかの部屋を住まいとし、屋根裏の部屋はマギスター・カントに賃貸していた。要はこの学者が哲学の研究に没頭するための静かな小部屋を提供することであったが、しかし彼はこの店で必要に応じて本を選ぶ機会もある、ということも重要なことであった。(S. 128)

ケーニヒスベルクでは何度か大火が起こっていて、この小説にもその生々しい描写があるが、この火災は一七六

四年のものである。カントはこれと、六九年、七五年の火災を体験した（文献⑥、訳書一五三ページ）。カントの「必要に応じて本を選ぶ」に関して補足する。「カントは書店主を喜ばせるような顧客ではなかった。彼は収入の少ない私講師だったから蔵書の大部分を売らなければならなかったし、のちには自分ではほんのわずかの書物しか買わなかった。彼はカンター書店で、またのちには別の書店で、いわば本の無料給付を受けた。カンターの全く鷹揚な気質からみて、彼は本の販売にはそれほど意を留めず、その関心事はむしろ学識ある人たちとの付き合いであった」（同、一一三ページ）。

続く場面。

11 「当出版社は何を出したかね？」とポックは尋ねた。

「今年は、六五年は私の最も実りのある年だった」とカンターは答えた。「私は一六冊をライプツィヒ書籍見本市に送ったんだ。今は下り坂だが、また再び上り坂になるだろう」

「カントは君んとこで著書を出版するつもりはあるのかい？」

「私は彼に訊ねていない。昨年、私は彼の完成原稿を受け取り、『視霊者の夢』は間もなく目覚めて現実となつた」（S.130）

『視霊者の夢』は、初版本の扉によれば、一七六六年、リガおよびミータウ、ヨハン・フリードリヒ・ハルトクノッホ刊である。

以上は第一部の描写で、第二部（一七七九〜一七八五）に入るとしばらくカントは登場せず、その半ばから再び姿を見せる。

主人公ユスティーナとカール・ゴットリーブの母マリアとの会話。

12 「略」カール・ゴットリーブは心の底からケーニヒスベルクを恋しがっているわ、ことに図書館のせいね。カントーは確かにちよつと前にマリー・エンヴェルダーの彼の印刷所の隣に小さな書店を作ったわ、でもカール・ゴットリーブはこれで満足せず、彼は大学図書館や城内図書館を恋しがり、伯父の指導を懐かしがっているわ」

「そうね、私分かるわ、私のカール・ゴットリーブは、大学が彼の憧れだった昔のように、本を必要としているのね」
「彼はカントとフンクが彼にたくさんのお話を教えてくれたって断言しているわ。けれども彼は長い間、カントの哲学と同じようには、フンクの法律学がなくて困るということにはなかつたそうよ。彼が言ったんだけど、カントは一つの泉で、神秘主義と独断論が彼の頭を混乱させるとき、彼はつねにそこから明晰さを汲み取ることができるとだつて」

「そうよ、ユスティーナ——フリードリヒ学院での宗教的な行き過ぎた行為、ヴェルナー教授夫人の聖なる呪文、マダム・ライヒャルトが自分の娘たちを許そうとしない彼女の偽信心、ダヴィデの詩編よりも世俗的なものを、ハーブに合わせて歌い始めることよ」(S. 181-82)

ここでは、宗教的な狂信、思想的な独断論を排除する、啓蒙思想家、批判哲学者としてのカント像が描かれている。この時カール・ゴットリーブはすでに大学を出て法律家として地方に赴任しているが、大学で彼が影響を受けたのは専門としての法律学より、カントの哲学だったことが告白されている。

妻を亡くして傷心のカール・ゴットリーブが、任地からケーニヒスベルクのブック家を訪ねての会話。

13 「カントー家の様子は如何ですか？」とカール・ゴットリーブは尋ねた。「彼は読書室を相変わらず豪華に備え付けていますか？　ローマとギリシアの詩人たちの立像がその壁に飾ってあると聞きましたが」

「私たちはすぐに、飾ってあった——と言うだろうね」と学長が答えた。「もう長くはないね、そしてカントーの読書室は崩壊する。彼の優しい心は実践理性には向いていないんだ。書店の屋台骨はガタガタなんだ。パチ

ニコは公開の貸し出し文庫を作ったんだ、感謝に価する事業だね」

「マリーエンヴェルダーのカンターの印刷所は隆盛ですよ、製紙工場と同様に」(S. 198)

「実践理性」はカントの術語の俗な用法で、すでに描かれたようにカンターの実務的な手腕の欠如をいっている。この時ポックはケーニヒスベルク大学学長であった。バチュコ (Batzko, Ludwig von, 1756-1823) は盲目の歴史作家で、ケーニヒスベルク大学教授にもなった人で、カントとも手紙のやりとりがある。

とうとうカンターの書店は倒産し、ダンツィヒに近い村にあるトゥルテナウの製紙工場が残った。ある小春日の日、主人公のユスティーナとその父のポック、および彼らの仲間がカンターの招待でその工場を見学を兼ねてピクニックをする。バチュコ、ポック教授、カンターの会話。

14 「私の視力も衰えているんですよ」とポックは言った。「でも私が老齢になるまでそれが無傷だったことに対しては、神に感謝しています。しかし今や、私がユスティーナに私の著作を口述筆記させる時が来ました。彼女は私の同僚が献呈してくれた本を読むのに熱心に務めてくれますが、それにはほとほと感心しますよ。その上彼女はカント教授の『批判』を少しでも理解しようと試みています」

バチュコは再び彼の方を向いて言った。「教授、カントが亡くなった肖像画家ベッカーの家を手に入れようともくろんでいるって言うのは、本当ですか?」

「そう、それは本当ですよ、彼は自分でそれを話してくれましたから。今はヒッベルがこの売買の斡旋をしています。家と庭で五千五〇〇グルデンは安いですな。ベッカーは数年前にアレンシュタイン親方に千グルデン以上支払ったが、しかし相続人は売却を急ぎたいのです」

「カント教授は鶏の鳴声を好まないのです」とカンターは言った。「市庁舎の近くでは雄鶏が彼を怒らせたので、私がこの平穩を乱すものの処理の世話をしました」

「自分の家でなら、彼の周りをもっと静かだろうね」とポックは言った。「大きな部屋は、それを私は肖像画を描いてもらった時から覚えていたが、素晴らしい講義室になるだろうね。学生たちは彼の講義に熱中している。彼らは絶え間なくケーニヒスベルクにやってくる彼の周りに群がるんだ。彼は一個の哲人になった。彼の学説は精神的な革命に通じていると思うよ。人類はケーニヒスベルクから理性と自己認識に導かれるね」(S. 205)

まず主人公がカント信奉者であることが明かされる。『純粹理性批判』の刊行は一七八一年であるから、ここで『批判』とはこの書のことであろう。画家ベッカーが一七八二年に死去したあと、カントが王女通り三番地の彼の家をヒッベルの仲介でその未亡人から買ったのは、一七八三年二月三〇日である。しかし諸種の事情があって、カントが実際にこの家に入ったのは一七八七年、六三歳の時(一説に九〇年)らしい。以来カントは死ぬまでほぼ一七七年間そこに住み、講義をし、そしてそこで死んだ(文献⑥)、訳書二二四ページ、および文献③)。

主人公がカント信奉者、カント主義者であることがいよいよはっきり示される場面に至る。ポック教授が死去(一七八五年)して間もなく、その未亡人と娘の主人公との会話。主人公は、父の命令で結婚させられた三二歳上の夫とは一度も一緒に住むことなく、ずっと実家で生活して、余所の子供たちを集めてその教育に情熱を燃やしている。

15 相変わらず生き生きと夢中になって話し込んでいる自分の娘を、教授夫人は驚いて見つめた。「でも、ユスティーナ、私たちのキリスト教よ！ それを子供たちに毎日教えてはいけないのかしら？」

「だって、お母さん、でも理性的な方法でならね。聞いてよ、カントが言っていることを！」

「おやまあ、あなたがすべてを知っているわけじゃないわ！」

「カール・ゴットリーブがああ頃マリー・エンヴェルダーで私に言ったわ、ケーニヒスベルクの市民は彼らの哲学者を誇りにしてはいるけれども、しかし彼の著作を読むことはあまりしないって」

「そうね、いったい誰にそんな本を読む暇があつて？　女たちは他にすることがあるのよ」

「女たちは、自分自身の魂の救済のためにのみ生きるより、他にすることがあるって言うのかしら、彼女たちは、聖書から読み取ったことを、同胞を救うために行動で実現しなければならぬんじゃないかしら。お母さん、私がお父さんの手助けをしていた頃は、私をおそらく外見よりは、多方面にわたって教育したわ。私はどうの昔から無知な子供ではないわ」〔略〕

ユステイーナは本を手を取って言った。「見て、お母さん、カント教授の著書からの一節よ」。彼女は印のついてある箇所をめぐった――

「へ子供は素直で、太陽のように明るい様子をしていなければならぬ。快活な心情だけが善に対する満足を感じさせる。人間を陰鬱にする宗教は間違っている。何故なら、人間は強制されてではなく、楽しい心情で神に仕えなければならぬからである」

ユステイーナはカントの言葉を中断した。「考えてみて、お母さん、今し方話した賛美歌集の歌を！」。そしてさらに読み続けた――

「へ快活な心情はつねに厳しく就学義務の中で押さえつけられてはならない。何故なら、そうすると快活な心情はたちまち消沈してしまふからである。もし自由になればそれは再び回復する。そのためには、心情が自由になれるような遊び、そして子供がつねに他人に凌駕しようとする務める遊びが役に立つ。その時心は再び晴れやかになる」

母のアンナはびっくりして耳を澄ましていた。「あなたは本を全く見ていないじゃないの、すべて暗記しているの？」

「私はカントの著書からもっと暗唱することができるわ。ああ、お母さん、何故私たち知的好奇心のある女性には、若い学生たちと同じように一緒に講義を聴くことが許されないんでしょう？」

教授夫人は微笑んだ。「だって、ベッカーの家の広間は狭すぎて、階段全体に人がぎっしりつまっていっぱい

なのよ。その間にどうやって若い女性が席を探すことができ、ことに私たちの哲学者は女性に全く門戸を閉ざしているの?」

「彼の何冊かの著書ではね。そこであの方は女について一般的に語っているわ。けれども彼は実生活の中で、彼が称賛する多くの才気に富んだ、才能豊かな夫人たちに出会っているわ、例えば、カイザーリング伯爵夫人、そして彼の肖像画を描いたグラウン夫人よ。〔略〕」

これにはアンナ夫人は何も言うことができなかった。「ユスティーナ」と彼女は少し間を置いてから言った。「でも、あなたはカント哲学で子供たちを苦しめてはいけないわ!」(S. 211-12)

ここでは、主人公がカント思想の熱烈な信奉者であることが描かれるが、それはカントの「市民は彼らの哲学者を誇りにはしているけれども、しかし読むことはあまりない」著書を暗唱するまでに読み込んでいることに示される。したがって、主人公が子供を教育する時にその基本理念にするのはカントの教育学である。ここで主人公が朗読しているのはリンク編『教育学』の一節である (Akad. Ausg., Bd. K, S. 485)。「教育学」が講義されたのは一七七六年から一七八七年の間の計四回であるが、それをリンクが編集して出版したのはカントの死の前年の一八〇三年である。なおまたここで主人公が女性解放思想の持ち主であること、およびカントの女性観が暗示されるが、それについては別に改めて論じなければならない。

(続)

文 献

□トキト

Erminia von Ollers-Batocki, *Das Taubenhau, 100 Jahre Familiengeschichte in und um Königsberg 1762-1862 als Roman erzählt*, 1968; Verlag Weidlich, Würzburg, 1986.

□参考文献

- ①Borowski, *Darstellung des Lebens und Charakters Immanuel Kants, von Kant selbst genau revidiert und berichtet*, 1804. (『ペーテークホルン・カントの生涯と著作』上巻合本版第一節)
- ②Jachmann, *Immanuel Kant, geschildert in Briefen an einen Freund*, 1804. (『ペーテークホルン・カント——その友人への手紙と物語心——』合本版第一節)
- ③Wasianski, *Immanuel Kant in seinen letzten Lebensjahren*, 1804. (『晩年のペーテークホルン・カント』合本版第三節)
- ④Immanuel Kant, *ein Lebensbild nach Darstellung der Zeitgenossen Borowski, Jachmann, Wasianski*, 2. Auflage, hrsg. v. Hermann Schwarz, Hugo Peter, Halle a. S., 1907.
- ⑤Immanuel Kant, *sein Leben in Darstellung von Zeitgenossen*. Die Biographien von L. E. Borowski, R. B. Jachmann und A. Ch. Wasianski, hrsg. v. Felix Groß, Deutsche Bibliothek Berlin, 1912. (『ロマンティーク・ヤマンテン・トミン・ノムキー共著『カント——その人生』』キネ説『創元社』一九六七)
- ⑥Fritz Gause, *Kant und Königsberg, Ein Buch der Erinnerung an Kants 250. Geburtstag am 22. April 1974*, Verlag Gerhard Rautenberg, Leer (Ostfriesland), 1974. (『ロマン・カウツ『カント・ニヨスベシタ』』竹内昭説『祥田出版社』一九八四年)
- ⑦Robert Albinus, *Lexikon der Stadt Königsberg Pr. und Umgebung*, Verlag Gerhard Rautenberg, Leer(Ostfriesland), 1985.
- ⑧M. Kaemmerer (bearb.), *Ortsnamenverzeichnis der Ortschaften jenseits von Oder und Netze*, Verlag Gerhard Rautenberg, Leer (Ostfriesland), 1988.
- ⑨Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften (Hrsg.), *Kant's gesammelte Schriften*. (坂坂正顯・金子武蔵監修 原佑編集『カント全集』全一八巻 理想社)